

聴覚障害児の状況モデル構築に関する一考察

－物語内容の産出課題を用いて－

○相澤 宏充

（福岡教育大学）

KEY WORDS: 状況モデル 因果性 聴覚障害児

（目的）

人は文章を理解する際に、文章の内容を現実や既有知識と結びつけることによって、心的な表象を構築していくと考えられる。井関・川崎(2006)は、その表象を「状況モデル」と呼び、5つの次元（同一性、時間性、空間性、意図性、因果性）の情報で分類し、物語文や説明文についてそのモデルの特徴を明らかにしている。

重度聴覚障害児については、行為意図の理解はできているものの他者の信念の理解に困難（大原・廣田, 2014）、因果推論の概念水準に困難（野原・廣田, 2013）が指摘されている。これらの特徴が、聴覚障害児の文章理解の際の状況モデル構築に影響を及ぼしているか確認が必要と考えた。

そこで本研究では、聴覚障害児の物語文の状況モデルの理解を検討するために、文産出課題を考案し、意図性、因果性の次元の活用状況について調査を行うこととする。

（方法）

聴覚障害児を対象とした教育課程をもつ特別支援学校である A、B 校に在籍する中学部生徒計 32 名(重複障害児を除く)を対象とした。統制群を大学生28名とした。

よく知られている物語を一部改変した文章を読んだ後、その中に記述されている動詞を組み合わせて、内容に即した文を産出させる課題を行った。まず、課題文を読んだ後、課題文を回収し、課題文の中であったイベントに関連した3つの動詞を選び（ex. 食べる、拾う、入る）、その2つを組み合わせた動詞ペア（a(食べる-拾う)、b(拾う-入る)）を作成した。1つの課題文につき動詞ペアを4組作成し、生徒に提示した。それぞれの組のペアについてaかbの一方の動詞のペアを用いて、物語内容に即した文を記述するように指示した。生徒は直前に読んだ物語の自身の記憶に基づき、文章を産出した。

この動詞の組み合わせでは、時間性、意図性、因果性の次元について選択できるように設定した。特に意図性と因果性の次元の使用状況について検討するために、意図性問題と因果性問題を作成した。動詞のペアa、bは、意図性問題では、意図性か時間性、因果性問題では、因果性か時間性のどちらかの関係性になるように設定した。この選択が、どちらのイベントの関連性をより記述しやすい・記憶しやすい傾向にあるのかの指標として分析可能と考えた。例えば、a食べる-拾う（意図性）、b拾う-入る（時間性）というペアでは、aを選んだ場合、「おばあさんは、大きくなり食べるために拾いました。」というような提示した物語に即した文章を書くことになる。この場合、対象者は意図性を選択し、イベントの意図性の次元を記憶しやすいと解釈した。

物語文は、改編した物語3つを、前半後半の部分に分け

6つの部分とし、最初の1つを練習用、残りの5つを課題とした。したがって、記述に使用される動詞のペアの数は、5つ×4組の20組みとなる。内訳は意図性、因果性の問題で各10組みであった。

（結果及び考察）

作成された文の内容語が2語以上本文と異なった場合、誤答と見なし、20問中、5問以上誤答した11名を除外し、21名を分析の対象とした。

意図性、因果性の聴覚障害児、大学生の選択率の平均(SD)は、意図性54(23)%、58(23)%、因果性46(14)%、59(15)%、となり聴覚障害児は、意図性についてはほぼ大学生と同様の結果であるが、因果性の選択率が10%程低い状態となっている。因果性の各問題について、大学生の選択率の低い順に並び替えて、Fig. 1 に示した。

また、聴覚障害児、大学生とも産出した文章を分析すると、時間性を選んだ場合、時間性の動詞のペアだけでなく、意図性や因果性として設定した動詞も産出（つまり、イベントを説明するために3つの動詞をすべて使用）している例も見られた。これは、意識的には時間性の次元で文を産出しようと試みたが、意図性や因果性の次元の情報も記憶のまとまりとして、意識せず使用していると解釈できる。この「意識せず使用」についても、Fig. 1 に示した。

Fig. 1 から、因果性問題の選択傾向について、聴覚障害児の方が因果性を選択しやすい問題(問題3)もあるものの、大学生の因果性選択率がそれほど高くない問題に関して、聴覚障害児はほぼ同等の選択率で、それ以外の問題で概して低い傾向にあると言える。また、意識せずに産出した率をみると、聴覚障害児の特徴であった因果選択率の高い問題3の差は縮まり、問題9や10で聴覚障害児の因果性選択率は高くなり差は小さくなる。しかし、より差の開く問題もあり、因果性の次元の情報を意識せずに使用した産出においても10%程度の低下が見られる結果となった。

今後は各問題による選択率のばらつきに影響を及ぼす要因について検討した上で、この低下の解釈について研究を進める必要がある。

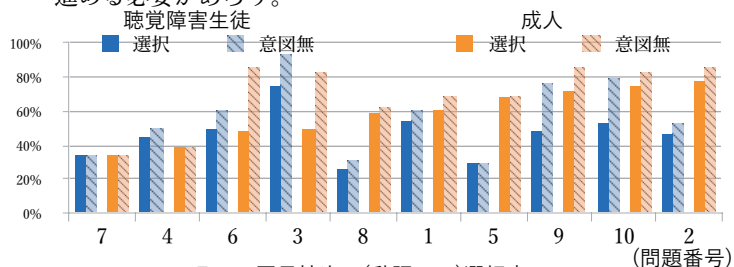


Fig. 1 因果性次元(動詞ペア)選択率

本研究は、日本特殊教育学会研究倫理綱領に基づき実施され、所属学校を通じ生徒の保護者に了承を得た。

(AIZAWA Hiromitsu)